

災害の恐ろしさと教訓

北京語言大学学生代表

見学日時：2009年10月20日（火） 11:10～13:00

見学場所：人と防災未来センター（神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2）

見学概要：

人と防災未来センターは、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災を記念して設立された施設である。マグニチュード7.2を記録したこの大地震では6,434人が死亡し、44,000人近くが負傷した。また、およそ65万の建物が損害を被り、30万人余りの人々が住む家を失った。当センターは阪神・淡路大震災の各種資料の収集・保存という以外に、防災に携わる人材の育成と防災方法の研究という重責を担っている。



写真1：人と防災未来センター

今年77歳になる久保さんが、阪神大震災での自らの体験を語るためにわざわざ来てくれた。優しい感じのする老人だった。久保さんが私たちに会ってまずしたことは謝罪だった。1937年当時、父親が関東軍の中佐であった久保さんは、当時の日本軍が中国人に対して行ったことの全てを認め、私たちに深々と頭を下げてその罪を詫びたのだ。私たちは久保さんのその誠意に心を打たれ、彼が語り始めた地震の記憶に強く惹きつけられていった。14年前、地震発生の前後数分間に自身の身に起こったことを、久保さんはありのままに語ってくれた。話を聞きながら、大自然の力の前に人間はかくも弱い存在であるということ、そして死と隣りあわせの状況に追いやられたときの為す術のなさをしみじみと感じた。久保さんの話しぶりがあまりに真に迫っていたので、たった十数秒の間に家族や家を失った人々が、変わり果てた町の姿を目にしたときの恐怖と孤独感が、ひしひしと伝わってくるようだった。それから久保さんは「我们在一起,明天会更好(みんなで力を合わせれば、明日はもっとすばらしい)」という文字の書かれた旗と黄色い菜の花の花束を取り出して私たちに見せてくれた。「黄色の菜の花は希望を象徴する花なのですよ」。久保さんが言った。四川大地震の際、久保さんは四川に向かった。旗と花はそのときに現地の学生が彼に送ったものだった。久保さんは「四川の被災者たちには早く悲しみから立ち直って

もraitai。必ず復興できると信じている」という励ましの言葉を託した。また久保さんは私たちに向かって「大地震がもたらした痛みを風化させてはならない。その経験や教訓を後代に伝えていかなければならない。そして命の尊さや共に生きることのすばらしさを世界の人たちに発信していかなければならない」と戒めるように語った。

防災記念館では阪神大震災を追体験した。

地震体験コーナーには、座席の前方にたくさんの多角形を繋ぎ合わせたような半円形の画面があった。観客を震え上がらせるような臨場感は、この特殊な画面とリアルな音響効果によるものだ。

地震体験が始まった。照明が消えた。真っ暗な闇の中でまるでこれから自分たちが本当の地震に遭遇するかのよう緊張感を覚えた。すると画面がぱっと明るくなり、そこに地震が発生する前の、早朝の神戸の風景が映し出された。人気のない街が静まり返っている。次の瞬間、地震が起こった。地面が猛烈な勢いで揺れ、地の底から恐ろしい音が鳴り響く。まるで地面が痛みにも耐えかねて発する叫び声のようだ。続いて地面が裂け始める。一瞬のうちに底も見えないような深い亀裂が道の真ん中にできていた。人間のつくったコンクリートの地面も地震という巨大な“生物”の手にかかるとは、せいぜいフランスパンぐらいの強度しかない。引きちぎるのに数秒もかからなかった。

道路沿いのビルはまるで紙で作ったおもちゃのように、垂直方向につぶされてしまっている。ぺちゃんこになって、もはや形すら留めていない階もある。数十階の高層ビルが一瞬にして背が縮んだかのようにになっている。ガラスの割れる音、コンクリートや鉄筋が崩れる音が轟音となって響き渡る。そのすさまじさは画面を見ている私たちを震え上がらせるのに十分だった。

バスはいつものように高速道路を走っていた。しかし、次の瞬間、巨大な轟音と共に目の前の道路が消えた。高架橋がいつの間にかなくなっていたのだ。運転手はきっと混乱の極みに陥ったにちがいない。しかし幸いにも、とっさに急ブレーキを踏み、路面が消えた一歩手前で踏みとどまった。生死はまさに紙一重のところで分かれた。

見る者を震え上がらせるような臨場感ある映像に照明や音響の効果が相まって、私たちはまるで阪神大震災の10数秒間に連れ戻されていったかのようなようだった。たった10秒間の地震は計り知れないほどの破壊をもたらした。大自然の力の前に人間はかくもちっぽけな存在であったとは……。人々が日々の暮らしの中で作り上げてきた世界は、全て紙でもできているかのように、たったひと揺れで破壊しつくされた。人の命がこんなにも脆いものであるとは思ひもしなかった。ある日突然、天から災難が降りかかれば、人の命はいとも簡単に奪われてしまうのだ。

防災記念館では、他のボランティアの案内で阪神・淡路大震災から得た教訓や防災分野における成果等の展示を見学した。ボランティアの話聞いて阪神大震災がもたらした被害の甚大さを改めて感じた。わずか10数秒の間に6千人余りの人命が失われ、25万棟弱の家屋が倒壊した。亡くなった人たちはもう帰ってこない。生き残った人たちは涙を拭いて、二度とこのように悲惨な代償を払うことのないように、知恵をしぼり、前に進んで行くしかない。人と防災未来センターは、まさに後世の人たちを教育し、警鐘を鳴らすことをその役割としている。災害に見舞われた時、いかに被害を最小限度に食い止めるかを人々に教える場所なのだ。

2名のボランティアの人が一連の実験によって“制震装置”と“耐震構造”について説明してくれた。見学に来る小学生にも解りやすいようにという配慮からであろうか、簡単な実験を通していろいろな原理が理解できるようにしてある。例えば、可動基礎やトラス構造を活用していかに地震による建物への影響を軽減するか、建物の基礎を深くすることで地震後の地下水による建物への影響が抑えられるといった

ようなことが紹介されていた。今回初めて知ったのだが、地震で倒壊する建物の大部分は、実は震動のせいだけで倒壊するというわけではなく、地震によって地下水の水位が上昇し、それにより建物の基礎が直撃されて倒壊に至るということである。解説員が解りやすく話してくれたことによれば、家屋の基礎を強化し、鉄筋を多めに入れ、道具を使って家具を固定するだけで、災害時の被害を軽減することができるということなので、是非実行したいと思う。

人と防災未来センターの前に、神戸港震災メモリアルパークを見学した。このメモリアルパークは、阪神大震災の当時の惨状や地震後の生活、復旧の様子などを後世に伝えることを目的に造られた記念公園である。園内には写真や映像などによって震災前と震災後の神戸市の全貌や神戸港の被害状況、復旧の過程などが展示されていた。

波止場に沿って歩いていると、本来真っ青な海があるべき場所にねじ曲がったコンクリートの道路がむき出しになっているのが目に入った。欄干の傍には斜めになった街灯が何本か突き出ていた。ガイドさんによれば、震災当時、最も被害が大きかったメリケン波止場の一部を、当時のままにここに保存しているという。メリケン波止場は今ではすっかり復旧しているが、ここに当時の無残な姿を残すことで、災害に備える意識を常に忘れてはならないと、人々に警鐘を鳴らしているのだ。



写真2 : 久保さんと北京語言大学学生代表の記念写真

神戸港震災メモリアルパークでも人と防災未来センターでも、地元の小中学生がたくさん見学に訪れていた。明るい子供たちの表情が震災記念施設の重々しい空気を和らげていた。あの子たちはおそらく神戸大震災の生存者たちの子供だろう。青空と降り注ぐ太陽の光の下での健康で楽しげな彼らの姿は、あの地震の中で命を落としていった人たちにとっても最大の慰めになるはずだ。私たちも四川大地震で傷ついた子供たちがたくましく生き、それぞれ明るい未来を切り開いていきますようにと、心から祈った。